Gallery PARC

新しいクリエイションをサポートする公募展「Gallery PARC Art Competition」第3回、開催にむけて

Gallery PARCは、2014年から、これからの才能をピックアップする公募展「Gallery PARC Art Competition」を開催している。第3回の募集、選考を目前に、審査員たちが、この公募展を語った。

――応募作品の選定は、どのようにされているんでしょうか?

正木　ポートフォリオとアーティストステートメント（作家の目指すものを伝えるテキスト）、そして Gallery PARCでの展覧会プランを提出いただき、審査員の3人で絞り込みます。

――入選の第一歩は、応募書類のインパクトでしょうか?

山本　若い作家のステートメントを拝見していて、「ただ、作りたいから作っている」という主張が前に出ているものも見受けられます。でも、作品を発表する以上、そこから一歩出て「人に作品を見てもらう」ということを、どう突き詰めているか。それはステートメントや書類に現れます。そこを見ます。

平田　この公募展は、選考条件がフリーなので、どんな作家を選ぶのかということは、選ぶ自分自身にも問いを突きつけられる。このコンペでたくさんの作家のステートメントを読むことは、我々にとっても本当に勉強になる。

――選ばれる作家の傾向というものはありますか?

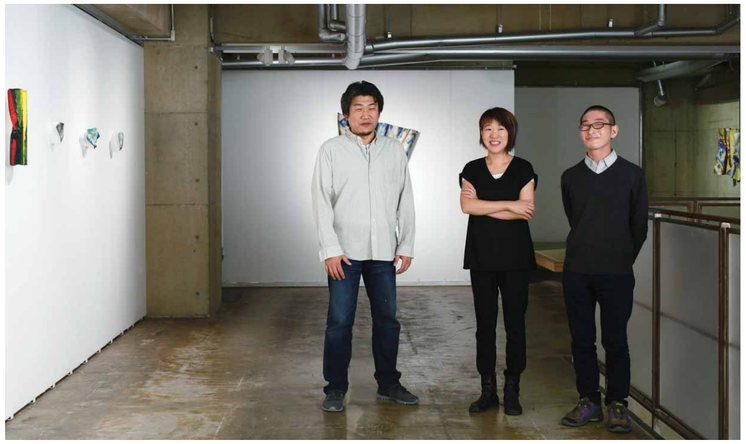
正木　ジャンルは定めていません。第1回は絵画と染色、キュレーション（展覧会構成）案を選出しました。

平田　僕も、傾向のようなものは想定はしていません。これまでの入選歴のようなものを想定せずに応募いただきたいですね。自分としても、裏切られたいって気持ちがあります（笑）。

山本　何かやりたい気持ちが伝わってくる人を選びたいと思います。このコンペは3組選びますから、その中には「応募資料を読んだだけではわからないけど、作品を見てみたい」と思わせる作家も選出できます。だからといって、特殊なことを無理に想定する必要はないですが（笑）。

平田　作家自身による応募もいいのですが、キュレーターによる展覧会案での応募も、もっと見てみたいですね。

正木　いまこの場を必要とする作家、これから伸び盛りという方に賭けたいです。作家には、このコンペの場を、自分の作品発表やキャリアのツールとして使っていただきたいんです。



「Gallery PARC Art Competition」審査員の3名。左から、Gallery PARCディレクターの正木裕介、京都芸術センタープログラムディレクターの山本麻友美、そして京都国立近代美術館研究補佐員の平田剛志。

「Gallery PARC Art Competition 2016」

2016年で3回目になる「Gallery PARC Art Competition」は、2016年1月に応募を締め切り、3つのプランを選出。6月から展覧会として発表される。スケジュールや選考の詳細は、HPをご覧ください。

2014年の入選者たち

自分にとってスタートラインとなる展覧会
薬師川千晴（1989年・滋賀県生まれ）

数多くの応募プランの中から選ばれた「絵画碑：Obelisk picture」が初個展となった。その後、京都芸術センターなど幅広い会場で作品発表するなど、活躍の場を広げている。
「自分の作品はホワイトキューブには似合わないと思っていたので、Gallery PARCで発表したいと思って応募しました。自分にとってスタートラインとなる展覧会でした」。

染色の枠を超えて発表できた
むらたちひろ（1986年・京都府生まれ）

絵画的な染色作品「時を泳ぐ人」を発表。「いままで染色というジャンルの枠の中で発表していましたが、このコンペで別の視点を得ることが出来た。観客から、これまでにない意見を聞いたのも刺激になりました」。

企画展示の貴重な機会
山城優摩（1987年・大阪府生まれ）

森川穣（1983年・大阪府生まれ）のキュレーション企画「A Sense of Mapping：私の世界の測り方　松本絢子・山城優摩」に参加した作家の一人。「若手作家が企画展示の場を得る機会は希少。ギャラリーの協力で、展示期間中の前、後期での構成を変えるなど、様々な挑戦も行えた」。

むらたちひろ展示風景

山城優摩作品

Gallery PARC
GRAND MARBLE

Gallery PARCでは、学生や若いクリエイターへの発表場所の提供や広報活動の支援をはじめ、アート・工芸・デザイン・写真・映像・パフォーマンスなどの展覧会やワークショップの開催を通じ、京都の文化の継承と創造に向け、様々な支援に取り組んでまいります。

Gallery PARC 2016年前半のスケジュール

1月8日（金）～1月24日（日）
「意識のスペクトル（Spectrum of consciousness）: 泉洋平」展
1400本ものテグスにより、ギャラリー空間を満たす光の在り処を顕在化させる大掛かりなインスタレーション展示。

1月26日（火）～2月7日（日）
「stereotypical」展（仮）
京都精華大学現代アートプロジェクト実行委員会主催の大学協力展。京都精華大学の学生を中心に、西山美なコ・川内理香子ふたりの女性作家による展覧会を開催する。

2月9日（火）～2月21日（日）
愛知県立芸術大学グループ展
愛知県立芸術大学油画専攻の在学および卒業生による大学協力展。絵画・インスタレーションなどの作品を展示予定。

2月23日（火）～3月6日（日）
但馬摩衣子展
木版リトグラフによる版画制作を続ける但馬摩衣子による個展。

3月8日（火）～3月20日（日）
京都造形芸術大学・日韓陶芸展
京都造形芸術大学と韓国釜山大学で陶芸を学ぶ学生などによる大学協力展。

3月26日（土）～4月9日（土）
迎英里子展
装置を用いたパフォーマンスや映像作品の個展。

4月12日（火）～5月1日（日）
植田苗水展
4月22日より1ヶ月に渡って開催される「KYOTO GRAPHIE 2016」にあわせ、写真にまつわる展覧会を3本連続で開催。第1弾はスペイン・グラナダに在住し、多くのフラメンコダンサーを取材する植田苗水による展覧会。

5月3日（火・祝）～5月15日（日）
麥生田兵吾展
Web上に日々途切れる事なく写真イメージを積み重ねていく「pile of photographys」に取り組む麥生田兵吾の3年連続・3回目の個展。

5月17日（火）～5月29日（日）
「high-light scenes」展（仮）
平田剛志企画。大洲大作、竹中美幸、中島麦による光と風景を考察する展覧会。

詳しいスケジュールはWEB参照
※展覧会のタイトルはいずれも仮です。また、内容・日時などは予告なく変更する場合がございます。

京都市中京区弁慶石町48（三条通御幸町西北角）三条ありもとビル「ル・グランマーブル カフェ クラッセ」店舗内2F
Tel・Fax. 075-231-0706
11：00～19：00（金曜日のみ20:00まで）月曜休
http://www.galleryparc.com/

Cinema

話題の映画『ライチ☆光クラブ』で中条あやみが、見せた「美」と「母性」

舞台から漫画、漫画から舞台、そして映画へ…。進化を遂げた『ライチ☆光クラブ』のヒロインである美少女カノンを演じた中条あやみに、その作品世界について話を伺った。

醜い大人を否定し自分たちだけの世界をつくろうとした少年たちの愛憎の物語を描いた『ライチ☆光クラブ』。
その『光クラブ』の偶像として、少年たちに囚われる少女・カノンを演じているのが、中条あやみ。人気モデルから女優としても活躍の場を広げている。古屋兎丸の原作コミックから抜け出たような、人形さながらの美少女でありながら、生身の女性らしい芯の強さや大らかな母性を感じさせる彼女の存在は、耽美で残酷で切ない『ライチ☆光クラブ』の世界で、暗闇にさす光のようにあたたかな希望そのものだ。
「『ライチ～』は残虐さと同時に、純粋さとか人間性みたいなものを描いた話でもあって、そのバランスが魅力的だなと感じました。カノンは機械（ロボット）であるライチに対して、人間とは何か、愛とは何かを教え導いてあげる役で、少し変わった子ではあるけど、すごく愛情に溢れていて。監督からは、ライチに対して、お母さんが子供に教えてあげるように、すべてを包み込むような感じで話して欲しいと言われたので、母性みたいなものを意識して演じましたね」。
19歳。女性としても女優としても、まさにこれから大輪の華を咲かせようという中条あやみだが、『ライチ☆光クラブ』の少年たちの幼さゆえの残酷さ、大人になることへの恐怖―といったテーマについて、共感できるところはあったのだろうか?
「中学生の思春期って、大人になることへの恐怖や葛藤がいちばん強い時期で、その感受性の強さが一歩間違えると悪い方向に行ってしまうこともあるのかなと感じました。
私自身は、はやく大人になりたいと思って、背伸びして大人っぽい服を着たりしたんですが、あと一年で二十歳だと思うと、逆に最近少し焦ってきて、もっと可愛い服も着ておこう！と思ったり（笑）。大人になると見た目だけでなく、感受性も鈍っていく部分はあると思うので、これから演技をやっていく上でも、今のうちにいろんなことをたくさん経験しておきたいですね」。

衣装協力：Million Carats ☎03-6447-0762

Profile 1997年大阪府生まれ。2011年「ミスセブンティーン」グランプリ受賞。雑誌『Seventeen』専属モデルとして活躍する傍ら、女優としても注目される。映画『劇場版 零～ゼロ～』で映画初主演を果たす。ポカリスエットCMも好評オンエア中。

カルト的人気コミックを映像化した、内藤瑛亮監督に一問一答
『ライチ☆光クラブ』は、「人間らしさ」を問いかける寓話

――コミックから舞台化され、熱狂的に支持された作品です、そのイメージをどう守り、あるいは壊そうとされましたか?
コミックや舞台にある面白さを映画世界で「生み出す」にはどうしたら良いかという発想で臨みました。フィクション性の高い世界観を構築することが大きなハードルでした。少年たちの秘密基地は「材料は実際に工場町にありそうな廃材」「男子中学生のイメージするカッコよさ」「子どもが作った拙さ」といったコンセプトを基に『ろうそくに剣心』美術・衣裳コンビにより、惚れ惚れするようなロケセットが完成しました。

――機械（ロボット）であるライチと、美少女カノンの心の通い合いには、古典的な怪物ファンタジーの趣があります。特定の作品からの影響はありますか?
『フランケンシュタインの花嫁』や『アイアンジャイアント』、石ノ森章太郎先生の漫画『人造人間キカイダー』が特に好きです。これらが胸を打つのは、異形の者が、我々が失ってしまった純粋さを持つからだと思います。ライチは少年たちが失ってしまった純粋さの象徴で、何色にも染まります。ライチは「殺人マシーン」になってしまうのか「人間」になれるのか。そもそも人間らしく生きるとはどういうことなのか。本作はそういった問いかけをしている寓話なのです。

『ライチ☆光クラブ』
少年少女の脆く多感な思春期を描いたダークファンタジー

黒い煙と油にまみれた町・螢光町の廃工場の秘密基地を舞台に、大人のいない世界を理想とするカリスマ・ゼラ、謎めいた美少年ジャイボなど、14歳を目前にした9人の少年「光クラブ」が繰り広げる、裏切りと愛憎。大人になる前の脆く、残酷で多感な思春期。そこで永遠の美の象徴として囚われた美少女・カノンと、少年たちが作り上げた機械（ロボット）・ライチの純愛を描く。釜山国際映画祭でワールドプレミア上映された。（2016年2月13日（土）より全国ロードショー）。

©2016「ライチ☆光クラブ」製作委員会